

～文化部コーナー～  
六甲おろしの風に乗って

第10回

## 高取山 (その1)

布引支部 神木 哲男

高取山は、長田区と須磨区の区境にあり、標高 328.8 メートル、神戸の背山の一つです。東は苅藻川、西は妙法寺川で区切れ、独立峰となっています。摂津富士とも称され、また須磨から宝塚に至る六甲全山従走路の通過点の一つともなっていることはよく知られています。



高取山頂上からの眺望

山の名の由来には色々な説があります。

正応 2(1289)年の妙法寺の文書には、「神撫山」とあり、神の所在する場所、神が天降り、その神をもてなす神聖な山や森を意味する「神奈備」がなまったものであるとか、「神撫」は、「カミウナデ」で「海人部」(ウナは海の意)を意味し、ウナデの神(事代主命=大国主命の子で大国主命に国土の献上を進言した神)を祀る山と考えられています(大国主命は、のちに述べる高取神社の祭神とも関係があります)。海人部は、その名の通り、漁師を指す言葉で、この地域の漁師達が漁に出て、海から美しく聳えるこの山に海上の安全を祈って付けられた名だとすれば、この名にも古代の人々の生活が反映しているといえるでしょう。須磨区の東北部、長田区に近い場所にこの字を音読みした「神撫町」という町名もあります。

江戸時代中頃の禅昌寺(須磨区、臨濟宗南禅寺派の寺院、この寺の山号も神撫山)の文書に「帝釈神撫、俗に鷹取山」とあって、少なくとも江戸時代の中頃には、「鷹取山」の名があったことがわかります。その由来について、「鷹の巣造を以て名とするか、所伝不詳」(元禄 14・1701 年「摂陽群談」)とか、「この山けわしくて鷹の巣多く、鷹を養う者巣を設けて、これを取る。よって鷹取山の名あり」

(明治 44 年「西摂大観」)とか書かれていますが、実際にここで鷹を捕ることができたのか不明です。「神撫山」とは異なり、この名前には農民の生活が滲み出ているといえましょう。また、江戸時代に山麓の村々への年貢賦課が高かったので「鷹」の字を「高」に変えて「高取山」としたのだともいわれていますが、どうでしょうか。

長田区の民話では、昔、洪水があつてこの山が水没したとき、水が引いたあとの山の松の木にたくさんの蛸が絡まっていたのを、麓の人が捕まえたので、「蛸取山」と名付けられたという、たいへん微笑ましい話もあります。

さらに、幕末、勝海舟や坂本龍馬が海軍操練所を神戸に開設した際、兵庫高取山の炭坑から出る石炭を近隣の塩田用や蒸気船用に売って利益が出れば操練所費用の一部に充当することが認められ、勝海舟は高取山から石炭を採掘しはじめましたが、海軍操練所が閉鎖され、そのままになってしまいました。当時の英字新聞は、高取山から石炭を発掘したので、この山を「Coal Mountain」と表現しています。時代の移り変わりで色々な呼び名があったことがわかります。



高取神社大鳥居

さて、山頂には高取神社が鎮座します。武

甕槌尊と豊受姫命の二神が本殿の主祭神

として祀られています。武甕槌尊は「古事記」・「日本書紀」(記紀)に見える神で天照大神の命を受けて出雲に降り、大国主命に国譲りをさせた神として知られています。豊受姫命は、聖武天皇の天平年間(729 年～749

年)に、僧・行基(奈良時代の僧、諸国を行脚して道路の修理・堤防の築造などを行った)が、大輪田泊(兵庫津)の築造にあたって、そこから仰ぎ見られる独立峰であるこの山に開発

の守護神として豊受姫命を祀ったとされています。また海上からもその山容がはっきりと見られることから漁民や航海者の崇敬も厚く、明治以降も参詣者が多く参道なども整備されてきました。

山上一帯には、<sup>すまひろのおおかみ</sup>末広大神・猿田彦大神・白瀧大神・荒熊大神・八幡大神など数多くの神々の宿る<sup>ほくら</sup>祠があり、山全体が神域として独特の雰囲気醸し出しています。神戸の背山の山中に、このような神秘的な世界が広がっていることを改めて感じることができます。

山頂からは、神戸市街が一望できるだけでなく、東は紀伊半島、西は明石海峡大橋から淡路島まで遠望でき、さらに海の彼方に登る朝日、沈む夕日を眺めることができます。



高取山頂上の碑